Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

条件は、愛 Only Love is Needed

中川, 雅道

(Citation)
哲学対話と当事者性：2019-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号19H01185）「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察」研究成果報…

(Issue Date)
2024-03

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486371

条件は、愛　Only Love is needed

中 川　雅 道　（神戸大学附属中等教育学校）

１　愛って、なんだろう？

愛する、というと、すぐに思い起こされるのは、きっと恋愛のことです。ロマンティックラブのことがついつい頭に浮かんでしまうので、愛について語ることは気恥ずかしさの入り混じる、難しいやりとりになってしまうのでしょう。愛について語ることは、喧騒に満ちた教室で行われる哲学対話、子どものための哲学[註1]とは少し異なったものだ、と思われるかもしれません。愛には、さらに異なった意味合いもあります。知的好奇心、知りたいと願う心というとき、きっと愛のことも同時に考えています。フィロソフィーは、そもそも知ることを愛するという意味で、古典ギリシア語のフィレインという動詞が含まれている。だから、フィロソフィーそのものが愛するという行為だと言われる場合もあります。私はとりあえず、そのようなさまざまな考えを行ったり来たりしながら、愛ということの意味を、その全体のうちで考えながら、子どもたちと対話する、子どものための哲学という試みの、ある側面について考えていきたいと思います。そのことはきっと、教室で孤立したり、組織の中で孤立したり、人々の中で孤立しやすいマイノリティと呼ばれる存在について考えることと、そう遠く離れてはいない、と思われるのです。

この考察の全体を通して参照することになる p4c Hawai‘i のメンバーのひとり Dr. Toby の論考[註2]には、とても興味深いことが書かれています。大学の倫理学の授業の冒頭で「人生で一番大切なことはなんでしょうか」という問いかけをすると、さまざまな答えが返ってくるけれど、主要な答えの一つが「人生で最も重要なものは愛だ」というものだ、というのです。その時に意味されている愛は、恋愛における愛のことではありません。Dr. Toby が当時担当していた大学の学生たちはほとんどが軍属の人たちでした。前線の戦地を経験した軍人たちは特に、愛だと答える。もちろん、そこには戦地に特有の困難があるのでしょう。

しかし、あえてこのことを一般化するとしたら、私たちにとって愛に満ちた関係性こそが重要なものなのだ、と言えます。もし愛に満ちた人生こそが、私たちに必要なのだとしたら、人々を教育する機関にもやはり、愛に満ちた関係が築かれ、愛することを教える必要がある。そのような愛を教育する手段として p4c Hawai‘i はとても効果がある。Dr. Toby が書いた論文の章立てを見ると、そのことが端的に表現されています。

【条件は、愛　Only Love is needed】

信念＃1 人生を豊かにするためには、愛に満ちた、人間的な関係が不可欠である
信念＃2 私たちの学校は、愛に満ちた人間的な関係を、意図的に教育すべきである
信念＃3 私たちの学校は、人間的な関係を教育することに十分には焦点を当てていない
信念＃4 子どものための哲学は、愛に満ちた、人間的な関係を教育する効果的な手段である

これらはすべて、信念と表現されていることからわかるように、決定的で、議論の余地のないものではありません。これらの信念から、子どものための哲学の意味について考えることは意味のあることだと思われます。

さて、ここまで論じたことから、こんなことも言えるのかもしれません。p4c Hawai‘i を実践する目的のひとつは、愛の教育であるということ、です。何が p4c で何が p4c ではないのか。その答えはもしかしたら、その実践が愛に基づいているのかどうか、なのかもしれません。信念をもう一つ足してみるとしたら「信念＃5 子どものための哲学は、愛に基づいていなければならない」ということになります。

２　愛されていない子どもたち

それでは、ここからは信念＃2「私たちの学校は、愛に満ちた人間的な関係を、意図的に教育すべきである」と信念＃4「子どものための哲学は、愛に満ちた、人間的な関係を教育する効果的な手段である」について考えてみようと思います。信念＃2 から始めてみましょう。愛に満ちた人間的関係を学校では意図的に教育しなければならないのがなぜか、ということを説明するために、Dr. Toby はキャロラインという子どものことを語ります（もちろん、実名ではありません）。

「キャロライン」は……、興味に満ちて、知性的で、強い意志をもった幼稚園児でした。……しかし、不幸なことに、彼女は大きな問題を抱えていました。……家庭内暴力、ホームレスネス、薬物依存、そして、互いに愛し合っていないことの影響から逃れるために、苦闘していました（Thomas B Yos, p. 53）

家庭内暴力、ホームレスであること、薬物依存といった問題は、極端な例であると感じるでしょうか。しかも、その同じキャロラインが、知的で興味関心をもった生き生きとした人物であること、を想定することはできるでしょうか。私には、こういった状況に置かれた子どもたちの顔を簡単に思い起こすことができます。愛されていない子どもたちの存在は、教職の場では際立って経験されます。もちろん、Dr. Toby も記述しているように家庭の社会的環境がしばしば問題になります。まずは、もっとも身近な両親から愛されているかどうか、子どもたちは両親や家庭を愛しているかどうか。社会的環境が意味しているこ

とはきっと両親が十分に愛されていて、子どもたちを愛する心の落ち着きがあるかどうか、ということ、そのものなのだと思われます。愛するためには、愛されていることが必要になる。

何かを学ぶために愛するためには、愛されていることが求められることは経験的には正しい。

ところで、そういった愛されていない子どもたちに対して、学校はどのような対応をしているでしょうか。学校で愛することを意図的に実践することは、特に必要ではない。過度な干渉はせずに、そのままにしておく。状況はわかっているけれど、手を出さないようにしておく。理由はいくつも考えることができます、受けもった子どもたちに公平に対応しなければならない。その子だけに注力することは、他の仕事をおろそかにすることになる。それでなくても、学校の先生は忙しいのに、これ以上仕事を増やすなんてことはできない……。

Dr. Toby はそのような組織的な対応についての、次のようの反論に言及しています。

> しかし、究極的には、私は、次のような反論によって、より説得されます。キャロラインがもし、あなたの娘だったら？もし彼女があなただったとしたら？（Thomas B Yos, p. 54）

もしキャロラインがあなたの娘だったら。キャロラインがあなた自身だったら、それでも私たちは何もせずに、捨て置いておくでしょうか。愛が人生の最も重要な要素であるとしたら、キャロラインは学校で習う学習目標を到達する遥か前の、人間として最も重要な、愛に満ちた人間関係を教育されないままに、時を過ごすことになります。私もやはり Dr. Toby と同じように、放っておくことなどできないな、と思います。

だから、学校ではどうしても、意図的に愛に満ちた関係を教育する必要があるのです。

３　鳥肌が立つ経験について

愛を教育しないといけないとしたら p4c Hawai‘i を実践することが、効果的な手段になります。これはきっと、そんなに難しいことではありません。それが信念＃4 です。ここで Dr. Toby は、p4c を実践する際に訪れる鳥肌の立つ経験について語ります。鳥肌が立つということを Hawai‘i では chicken skin と表現します。きっと日系移民の影響で「鳥肌が立つ」という日本語が英語に影響したということなのでしょう。子どもたちとともに対話する試みを続けていると、鳥肌が立つ経験は週に何度も経験します。きっとそのことはとても重要なことなのです。

こんなことがあったそうです。ある小学校のクラスで、子どもたちが p4c のことをとても気に入って「p4c の時間は私たちの時間だ！」と言いながらカーテンを締め切って p4c を

心から楽しんでいました。そういえば、Hawai‘i の別の実践者は、p4c を子どもたちにとっても気に入られて、通るだけで子どもたちが大騒ぎするので「ロックスター」と呼ばれていました。愛の影響は強いものです。Dr. Toby のクラスに話を戻しましょう。カーテンを閉め切ったクラスで「ガール／ボーイフレンドと遊びに行くべきだろうか」という問いが出されます。きっと楽しい雰囲気の中で、友達と遊びに行く場所をなんとなく考えながら、みんなで選んだ問いだったのでしょう。ところが、ある発言が出されることで、その楽しい空気は一変することになります。

> ガール／ボーイフレンドと遊びに行くべきだろうか？もちろん、子どもたちは笑いました……すると、普段はほとんど話すことのない、ある女の子が手をあげました。「友達と遊びに行くほうがいいと思う」と静かに言いました。「だって、ドメスティックバイオレンスみたいなことだってあるから」（Thomas B Yos, p. 56）。

確かに、こういうことが起こることがあります。ふとした折に、そのコミュニティに参加する子どもたちが、ぽろっと問題を表面化させる。友達と遊びに行くということは、家庭から離れること、です。友達と遊びに行くべきかという問いには、家族と一緒に家庭で時間を過ごすべきか、という問いも含まれています。家庭との関係が良好であれば、笑って話せる話題かもしれません。でも、そうでない場合には。きっとこの時、周りの子どもたちは問いの意味することに、はっと気づいたはずです。

> きっと小さな針が落ちる音だって聞こえたことでしょう。「おじさん」が、その子の母親を殴っていることを、おそらく他の子どもたちは知っていたのです。おそらく、その子のことも殴っていたのでしょう。探求のトーンは、変化しました。ジョークを言う人はいません。クールに見せようとする人もいません。きっとあなたは、子どもたちの愛と援助がその静かな少女を、温かいブランケットのように包んでいくことを感じることができたはずです。真実のコミュニティでは、人はお互いをケアし、そして、そのことを示そうとします（Thomas B Yos, p. 56）。

子どもたちは、あるいは、人はこのような時、素直に反応します。その子の言いたかったことを受けとり、受け止め、何かを話そうとします。「暴力にあうことがあるから、友達と遊びに行くほうがいい」。その子が本当に求めていたのは、暴力ではない、きっと家族からの愛だったのでしょう。きっとその場では、決定的な答えは出ることはないでしょう。しかし、私たちが感動し、鳥肌が立つ経験をするのは、その場にいる大人がどんな取り繕いをするよりも自然に、子どもたちは発言を受け止め、そして、その人のことを受け止めているということを、はっきりと示そうとするのです。

愛とは、受け入れること、です。また、受け止めること、です。そして、もっと真実の意味では、受け止めることができないということもまた、受け止めること、です。

４　受け入れること、受け止めること、受け止めないこと

鳥肌が立つ経験は、私にもたくさんあります。ひとつ、愛の経験について話してみたいと思います。

安楽死・尊厳死のことについて考えるという授業をしていたときのことです。中学校３年生の国語の時間に、森鷗外の『高瀬舟』を読んで、問いを立てていました。あるクラスで、友達に死にたいと言われたらどうしたらいいか、という問いが選ばれました。確かその時は、コミュニティボールを一周まわして、順番に答えていくという流れになっていったと思います。やっぱり、どうにかして受け止めて、友達の話を聞いて、なんとか止めるということを、順番に話していくということになりました。

その対話の終盤あたりのことだったと思います。ついに、手を挙げる人が出ました。挙手して積極的に話す、という流れにならない場合、終盤になって挙手する人が登場するということも、経験的によくあります。流れが変わりそうだな、と直観しました。挙手した人が話し始めます。「友達に相談して死ぬことを止められてしまったら、それって話を聴いてもらったことにならない、です。変なことだけど、この場合に本当に話を聴いて認めるのは、友達が死ぬことを認めることだと思います。だから、相談を受けることはとても難しい……」。その話の後に、沈黙が続きました。

きっとその時、クラスメートの頭には、その子が自傷行為を繰り返していて、実際に、こういう相談をしていることを知っていたのでしょう。

そんな時に別の子が、悩みながら話し始めました。「うーん、とても難しいけど、誰かのことを受け止める、話を聴くっていうのは、ただ肯定するっていうのとは違うと思うんです。例えば……、うーん、お母さんが私がこけてるのに、めっちゃ笑ってくるんですよ。むかつくじゃないですか。でもお母さんは、同情されるよりいいでしょって。そうかもしれないなって思って、これももしかしたらコケてる私を受け入れたってことなのかもしれない、です」。重い空気が少しだけ和らぎ、笑いの後に、納得感が漂いました。私はとりあえず、その時に何かを言ったかどうか、頭がいっぱいで覚えていません。

別の子が、その日のワークシートにそっと書き込んでいました。「この授業を受けることができて、本当に良かったです」。

愛すること、受け入れること、受け止めることは難しいことです。時には、それは真実の意味では、受け止めないことも含意することさえ、あります。しかし、やはり私は誰かが誰かのことを受け止めることは確かにあるし、p4c はそのことを教育する良い方法だと思います。

さて、信念＃5 子供のための哲学は愛に基づいていなければならない、は十分に説明されたでしょうか。私は p4c が愛に基づいていなければならないと主張することで、愛に基づかない p4c が偽物がと言いたいわけではありません。ただ、p4c って難しいから、どう

すればいいかわからない、という人たちに、愛してみればいいんじゃないですか、と答えたいだけなのです。少しでも何かが伝わることを、祈っています。

最後に、マイノリティを含むすべての人たちにとっても愛が求められている、ということで、私の考えを終わってみたいと思います。マイノリティについて考える機会を設けたり、マイノリティに位置づけられるために、苦しんでいる人たちとともに対話を続けることはとても重要なことです。しかし、私には、それと同じくらい、すべての人を同じように愛することも重要だと思えるのです。そのように愛し、愛されること、受け止められ、受け入れられ、そして時に受け止められないことを続けていくことで、どこかで誰かが救われるということも、きっとあるように思えるのです。

【註】

1　この論考では、哲学対話と子どものための哲学という言葉を区別せずに使っています。哲学という営みが、誰かと誰かの対話から始まったことを強調するために哲学対話という言葉が使われることがあります。子どものための哲学は、マシュー・リップマンがアメリカ合衆国で始めた哲学教育である Philosophy for Children（P4C）の訳語です。筆者は特に、ハワイ州で実践されている p4c Hawai‘i に強い影響を受けています。大学で探求されるアカデミックな哲学とは異なって、土地、場所、個人の固有性を強調するために頭文字が小文字で表記されています。

2　Thomas B. Yos, Raising the Bar: Love, the Community of Inquiry, and the Flourishing Life, *Educational Perspectives*, University of Hawaii at Manoa, vol. 44, 2012.